

特集 コミュニティの再生・創生と宗教

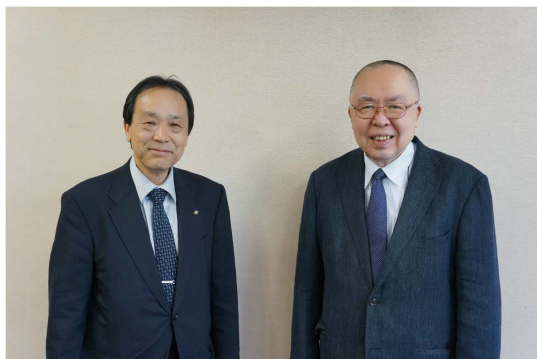
対談 伝統宗教とコミュニティのゆくえ

星野英紀¹

櫻井治男²

司会 藤原聖子³

原発事故・過疎少子化といった、日本の社会を根底から揺るがす諸問題は、戦後の「ムラからマチへ」という転換において何が失われたのかを改めて私たちに問いかけている。〈ふるさと〉をどう蘇らせるか、伝統宗教はどのような役割を果たせるのか。時間をかけた現地調査の経験をもとに、本研究所前理事長・前理事が率直に語り合った。



2016年6月26日実施

¹ほしのえいき：大正大学顧問（写真右）

²さくらいはるお：皇學館大学特別教授（写真左）

³ふじわらさとこ：東京大学大学院准教授

そもそも「地域共同体の解体」とは？

藤原 本日は「コミュニティの再生・創生」をテーマに、仏教界・神道界を代表する研究者であられ、調査のご経験も豊富なお二人の先生方にご対談いただきます。

ちょうど先日、今学期私が担当している大学1年生と2年生対象の授業でのことですが、一人の学生が質問にやってきて「(戦後史に出てくる)地域共同体の解体って何ですか?」と(笑)。言葉一つひとつの意味はわかっても、イメージがわからないのでしょうか。生まれたときから東京に住んでいて、親もそうなので田舎を知らないです、なんていう今の学生は、そもそも地域共同体を経験したことがなく、それが解体したと言われても、ピンとこないようなんです。逆に「人とものつながり」という点では、LINE等で過剰につながっているくらいなので、つながりや絆がなくなったのは問題だということを言葉で説明されても、まったく自分の経験と結びつかないし呑み込めないということがあるようです。

櫻井 私が比較的よく使うのは「ムラ」という言葉で、「戦後すぐにムラは解体された」とか言いますが、ムラというのはまったくわからない、という学生は多いですね。私自身はある程度感覚的にわかる。というのは、親の世代がムラの出身なんですね。それが都会地の方へ出てきて、都会地と言いましても京都市南部の宇治市で、戦後まもなく住宅地として開発されたところですが、そこには地元のお宮さんのお祭りや盆踊り大会があり参加した。そういう形でのムラへの関わりがあったので、何がこの地域のものか、そこへ新たに参入してきた私たちはどこで関わる事ができて、どこで省かれているのか、というようなことが感覚的にはわかるんです。その点、今の学生たちは関わりが少ないというか。ひょっとしたら子ども時代には地域と関われるような場にいたのかも知れないですけども、中学生・高校生となると、地域から離れて、拡散した場面での仲間ができてきますよね。そういう点では、地域性や地域という言葉そのものが、捉えにくいのではないかなあと思いますね。

星野 その「ムラ」というのはどういう単位でお考えですか。

櫻井 そうですね、歴史的にどう捉えるかは別として、地縁的な世界で、お互いの顔が見え合っている程度生活が等しい空間ですね。

星野 私が村落調査のようなことを始めたのは東日本大震災があっからなんです。震災と原発事故によって急激な共同体の解体を経験した方々が、ムラというか、ふるさとというものに大変恋い焦がれるようになる。そのときに、ふるさとの景色やイメージの中に、お宮、寺、先祖の墓というのがあって。仮設住宅に住んでいても、みなで集まっては「帰りたいねえ、早く」というようなことを話している。まあ、お年寄りですけどね。

それで、改めて、地域共同体とは一体何なのか、と思うようになりました。私の父は越後の山の中の生まれですが、若いときに東京へ出てきていますから、私は東京育ちでして。まあ、私の寺の檀家にはまだムラの名残がありますが、そうは言っても田んぼがあるではないし、私自身はそういうことで知らないんです。そこで、そのムラというものの仕組みと、どうやってみんがそうした関係性の中で生活してきたのだろうか、ということに関心をもって、嗅ぎまわっていて。「ああ、ムラってそういうふうになっていたんだなあ」って。

例えば、今度の震災で、消防団というのは岩手から千葉まで入れると200人くらい亡くなっているんです。何をしていたかということ、津波がくるとなると水門を閉めに行くんですね、津波とிட்டって大したことないと思っていますから。それで津波にやられてしまったという人が多くて……。村で火事があるときに、最初に駆けつけるのは消防団なんです。消防団というのは準公務員で、ほとんどボランティア。「ああ、こういう人たちがムラを支えてきたんだなあ」ということですよね。まあ、それも今は、過疎で人がいないので随分問題になっていますけれども。

それから、僧侶でありながら改めて思うのは、先祖というものに対する強いつながりですね。僕が調べたところでは、5~6代経っている住

民が多い村ですと、本当に「ご先祖の土地を私たちが離れることに、申し訳なくてしょうがない」「早く帰りたい」と。で、すごくみんな仲がいいんですね。多くの方は出稼ぎで都会地に勤めても、65歳になって年金が出るようになると、田舎へ帰ってくる。子どもや孫が都会にいても、車で1時間ぐらいで来れますからね。それで家庭菜園やって、いろいろと楽しみがある。本当に「柱の傷はおととしの5月5日の……」みたいな古い家に住むわけですよ。「おーい」って呼べば、「何ちゃん」と、昔からのファーストネームで呼び合っている、みたいな、そういう村を取り戻したいというのがあって、それを私は実地調査をしながら追いかけていた。

「ムラ」の再生は時代錯誤か？

星野 原発事故で、もう30年も先まで帰れっこない、100年先まで無理だ、なんていう人が出てくる。そうすると、仮の町や新しいコミュニティを作ろうということになる。ところがそういった新しいコミュニティの建設に関わっているのは、社会工学や社会学の学者で、伝統的地域共同体というものは仇敵のようなものと考えている先生も少なくない。「前近代の封建的組織だ」「とんでもない話だ」と。そういった人たちが作りたいのは「フラットな」コミュニティ、「フラットな」社会です



から、宗教学のことも民俗学のこともぼろくそに言う。「癒しとか絆とか言って、何ができるのか」と。でも僕は、それは違うのではないかと……。どんなコミュニティでも感性的なものは必要。それにフラットな組織を作るといのは、企業がもう10年も20年も前にやっています。企業にいた人に訊くとほとんどの会社が成功しなかったと言うんですね。

藤原 それはどうしてでしょうか。

星野 それはやっぱり、命令系統がないと人が動かないんじゃないですかね。地域共同体には、近代路線のコミュニティづくりにはないような秘密があるという気がします。あの、祭りの復活というの、そういうことだと思うんですね。

櫻井 先生がおっしゃったような「濃密な人間関係」というのが、戦後、それがあがるゆえに個人が埋没しているという批判が出て、旧来の共同体の解体となるわけですけど、その濃密な人間関係というものには、実際に調べてみると色んなレベルがあるんですね。さきほど先生も話されたように、昔、あるいは地域によっては今も残っているんですが、名前と呼ぶ、苗字はいらない、という。もし同じような名前だったら、「どこそこの」と屋号を付けると。そうしたところは、しかしまったくフラットではないですね。

例えば、「お寺の大屋根を葺き替えますよ」とか「神社の建物を造り替えますよ」といったときに、村の中で募財するでしょう。そうすると、ある意味名譽的にというか、昔からの家が一番上に突出するんです。で、その下はある程度並んで、しかも独り身の方とか、そういう方のことも配慮して、基本的にみんなが出せるようにするという、そういう仕組みを作っているんですね。

星野 なるほど、そういうことはありますね。

櫻井 その寄付金を分析すれば、格差があったり、「村の中はフラットじゃない」というようなことがあるのかなとは思いますが、しかしまったく平等な割り方だと、逆に出しにくいんですね。だからある程度はこれくらいという仕組みが決まっている。で、今はそれに加えて、村の中だけでは賄えない部分を補うために、村から出て行った人とどうつながるかとか、地域に何らかの形で関わっている人たちをどういうふうに受け入れるかとかいうことで、その地域の運営を工夫しているところがありますよね。

星野 そうした、かつて完結したコミュニティがあったところで、それを新しく作るにはどうすれば……。例えば消防団というのはボランティアですが、防犯もやれば消防もやる。そういう組織は一体、新しいコミュニティではどうなるのか。それなら119番に電話すればいいというのは、都会に住んでいる人の発想だと思うんですよ。災害なんかのときには〔消防署は〕動かないですよ。

それから、細かい話ですけども、原発から5～6キロのところに浪江



浪江町請戸地区の慰霊碑（仏式）（2014年7月30日）

町という町があるんですね。双葉や大熊や富岡というところはまさに原発立地で、そこでは国がバスを出して逃げさせるわけです。でも、浪江には全然情報が入らないんですね。で、「次の日に原発が爆発する」という話になると、一番山側の方に市町村合併で同一町になった地区があって、そこの役場の支所に町役場の人が逃げて、町民もそこへ逃げろと指示を出したんです。そうすると、多いときで5,000~6,000人が、1,500人くらいの村の集落、そこに逃げていく。そこに避難していた、多いときには従来の住民を入れて8,000人いたと言われますが、みんなが炊き出しをして、犯罪も起こらずケンカも起こらずに過ごすんですね。そういうことってなかなかできないし、農家ですと、秋に採れた野菜とか蓄えていて、それをみんなで共有するんです。そんな共同体ってなかなか考えられないなあと思って。

つまり、昔の共同体というのは、「ふるさとを共有しているんだ」という連帯感がある。その感覚は、特に危機的な状況ですと、非常に重要なことですよ。ですが、社会学者は、そんなことは社会の仕組みに何ら影響がないというわけですよ。「癒しだとか絆とか言っていて、いい社会ができるのか。そんなものは単に感情的・感性的なことに訴えただけで、組織的にきちっと作り替えなきゃだめだ」と。しかしそれは理想論みたいなもので、なかなかそうはいかないんじゃないかなあと思ってしまう。社会学者がみんなそうだとは言いませんけれども、「前近代的な地域共同体はよくない。理想的な近代社会の民主主義的なコミュニティづくりに進むべきだ」といっても、人間ってそう簡単なことではないんじゃないか。

異質なものも包み込む団結力

藤原 そうしますと、「ムラ」と聞くと村八分ばかり連想するのは、一面的な見方であると……。

星野 そうですね、どこにでもいるのが、たちの悪い人間、勝手なこと

をする人なんですね。かつて古今亭志ん生という落語家がいる、「らくだ」という演目がある。それは長屋に住んでいるどうにもならないやつのお話なんです、が、「らくだ」さんの葬式というところから始まるんですね。そのときの志ん生の枕詞というのが、「昔は、どこの長屋にも必ず、わからず屋ってというのがいたもんですよ」と（笑）。私は人類学が好きで、昔はマーガレット・ミードやルース・ベネディクトなんかをよく読みまして、ミードはサモア辺りを調べている人ですが、deviant、逸脱者というのが出てきますね¹⁾。どんな村にもしょうもないやつがいる。でも、そういう人も包含しながら、昔の村は成り立っていたというところがあって。

仮設住宅も同じですよ。阪神淡路大震災では、仮設住宅のユーザーを抽選で選んだんですね。そうしたら、精神的に具合悪くなる人がたくさん出たわけですよ、孤独で……。それでどうしたかということ、できるだけ同じ村の人を同じところに入れる、できれば^{あざ}字も同じにする。そうすると、行政はものすごく楽なんですよ。だから、そういうものの持つ強さというか、確かに封建的な面もあるんだけど……。

先ほど櫻井先生がおっしゃたようなムラの仕組みにしても、例えばお寺やお宮の寄付を頼むときにも、出すべき庄屋の家が一番上で、いくら出す。そういうような序列がある。だから一番上が出さないと、下が出さない。出さないというか、出せないんですね（笑）。あんまり出しちゃうと「あの家、生意気だ」と言われるんでしょうね。だから、そういう長い間のノウハウみたいなものがあつたんだと思います。確かによくない面もあるんだけど、コミュニティが崩壊した、じゃあそこで民主的と称することをやればいいのかということ、そうもいかないのではないかと……。

そういう意味では、昔のコミュニティの方が意志決定はうまくいったわけですね。福島大学に町村合併反対の社会学者がいて、今井照先生²⁾という方ですが、「町村合併が日本を悪くしている」というんです。その先生が一番褒めるのが、戦後1回も町村合併しなかった村。その村は、原発が爆発したというときに、国も県もあてにならないし、情報も

入らないとなって、村長が、自分の判断で「みんなで逃げよう」と言って逃げたんです(笑)。立派なものですよ。町村合併しなかった村は、意思統一ができたということですよ。その村の約1,500人いる村民のうち、8割が同一姓だと言われています。役場の人は4割だと言っていましたけど。それこそ役場の中でも、役人同士がファーストネームで呼び合うんです。

櫻井 その、ものぐさ者、逸脱者も全部抱えるという話ですけど、ちょうど平成12年から社会福祉の基礎構造改革が始まりまして、それまでは、福祉サービスは高齢者とか障害者とか、分野別に対応している法律だったんですね。それに対して、これからはむしろ、誰もが地域で自立し、主体的に生きられるような仕組みとして、地域福祉を推進していくこと。その流れで今も来ていると思います。そこには、社会保障、福祉関係経費の膨らみをどうするかという問題も関係するのですが。

地域福祉の推進にあたっては、地域コミュニティの大切さとか、新たなコミュニティの創出ということが言われるんですね。そのときに私が思ったのは、新しくこれから作られていくコミュニティは別として、既にある地域の中には、先生がおっしゃったようないろいろな関わりでつながっている部分がある。その部分をうまく活かさないかと思うんですが、そこをどう見るかという点が、行政には欠けるというか、物足らなさを感じているんですね、一律にことをするのではなく、この地域の特性はこうなっているから、もっとここを活かしたらよいのではないか、という点ですね。

そういうときに、宗教研究をしていますと、お寺の檀家さんや神社の氏子さんのつながり、あるいは昔で言う「講」のような、信心を共有するとか、家や地域をちょっと離れたつながりがありますよね。そういうものを活かすという発想が出てくるわけです。しかしこれは、政教分離ということを前面に打ち出してこられると、動かない。行政の人も「こういうふうにつながっている」ということがわかっていて、それでも活かさない、そういう側面があるように思います。

藤原 そこに宗教学者がどう関わっていくのか、という課題ですね。

宗教や文化の視点抜きには理解できない

櫻井 だから私は、あの、怒られる立場ですけど(笑)、伊勢市の市町村合併協議会の新市ヴィジョンづくり委員長も務めました。宗教を研究しているということで、宗教の色々な点をきちっと見たうえで、それを施策に、ということではなく、地域の人を見る視点とか、文化として見た場合に、そういう話ができるんですね。ですから堂々と宗教学をやっているという立場で、委員会に関わったりしてきましたが、実際には専門性とは関係がなかったのです。普通でしたら、こうした場合は社会学者とか、政治学や地方自治の専門の先生が委員長になることが多いんですが、伊勢市の場合は……。

星野 それは伊勢だからでしょう(笑)

櫻井 いや、それはわかりませんが(笑)。合併は1市・3町村の対等合併という形で、新市をつくりあげるうえでは、2,000弱の調整項目があるのですが、補助金の出し方や施設の利用料が異なるなど、いろんな違いが生じていたわけです。旧来の祭りをどう行うとかの問題は住民側からは重要な議論となります。合併後も、ある地区では、昔からの村の歴史があり、地区としてまとまっていて、自分たちがどういうふうにごまごましていけばよいのかということに、非常に熱心なんです。いろんな課題や提言を取りまとめ要望を出される。それに対して、近世以来都市化している旧伊勢市は、分散気味で、内部的な各コミュニティのまとまりに精粗があり、あまり広域だと全体的な意識が現れにくいんですね。

星野 それはそうでしょうね。文化のないコミュニティなんてどこにもないわけですよ。社会の仕組みは新しい今ふうのものに作るとしても、じゃあ文化はどうするのか、その人たちが持っている価値観はどう

やって支えるのか。何々祭りやりたいっていても、そう簡単にはできないわけですよ。復興住宅というのは、これがまた実に愛想もない建物で、ツートンカラーの同じ家ばかりが建つわけです。さらに象徴的なのが、木を植えないということ。非常にメカニカルな家になって、潤いみたいなもの、感性的なものが欠けてしまうんですね。だから、「お宮さんにぜひ来てもらいなさい」と、「お宮に来てもらうならこの土地も安く売ろう」と、そういうことを行政か誰かが言えば別だけれども、お宮さんの方からというのは、なかなか。お金も要りますしね……。

復興住宅なんていうのは、やっぱりギスギスするんじゃないかなあと思いますね。だから、文化の復興ということになると、お神楽が被災した村の復興の起点になったという話がありますけれど、津波にさらわれた、あるいは壊れたけれども前のところに家を建てるというときには、お神楽のようなものも復興のきっかけにはなると思いますね。それもやっぱり、お祭りの持つ喜びというか、感性に関わるものでしょうね。

それなのに、日本の社会学の主流では、歴史のある地域共同体はやっぱり悪であると(笑)。「それをなくして近代的な社会にしよう」「ゲメインシャフトからゲゼルシャフトへ」³⁾みたいな、進化論的な発想が根底にあるのではないか。そのゲメインシャフトの世界にあった温かみというか、濃密な人間関係が持つ、厄介だけれども楽しいところ、任せられるところを、もうちょっと注目しなきゃいけないと思いますね。

民俗学のムラ研究の再評価

櫻井 今から50年ほど前のことですが、きだみのる、本名は山田吉彦と言ってレヴィ＝ブルリュールの『未開社会の思惟』の翻訳者なのですが……。彼は自分で南多摩郡恩方村のお寺に住み込んで、岩波新書から『につぼん部落』という本を出しましたね⁴⁾。山田は、マルセル・モースに師事したというので、基本はデュルケム系統の学者でしょうか、社会の在り方というのはよく見ていたと思います。

星野 民俗学の研究者もすごいですよね。地球を何回も回った、なんていう人もいるくらいだから。

櫻井 それでいて、社会学的なものも随分されていたなあと思うんです。結局、色々なものの関係性に注目されていた、ということですけども。それともう一つは、そういうムラを扱ったものの中で、比較的よく読まれるのは、宮本常一ではないでしょうか。『忘れられた日本人』とか。村の寄り合というのは、しつこいほど何度も何度も開かれて、最後まで全員一致を目指す。その中には、そういうことをうまくしていくリーダーがいたり、あんまり突出した人に対しては「それはおかしいんじゃないか」と意見を言う機会があったり。だから、ムラというのは、「おかしいんじゃないか」という意見も受け入れられるし、「どうしてもあの人は頑固」「じゃああの頑固をどう説き伏せるか」と、そういう智恵を絞ったと思うんですね。そこのところはある意味で、多数決だけではないムラの論理かもしれませんね。

星野 その頑固者とか逸脱者というのは、逸脱しているけれどそれでも村の一員なんですよ。だから「あいつはもうしょうがない奴だが、受け入れていこうやないか」と(笑)。そのあたりは賢いと言うか、ある意味、みんなを包含していくというところがあって。僕はね、最後に調査に行っ、まだ続けたかったなあと思っているんですが、葛尾という村、町村合併しないで村長と一緒に逃げたという村ですね。そこには60~70人の、東京から定年に入って来た移住者がいるんですよ。今行ってもきれいなところですよ。牛をたくさん飼っていてね。東京から車で3時間くらいですね。桜で有名な三春のそばですけども。移住者の何人かは仮設住宅に入って、その自治会の会長をされている人もいますよ。「Iターン」という言葉がありますけれど、都市から村に移住しても、みんなと馴染まないということが多いんですね。けれども葛尾はそうではない。だから、やっぱりそういう人たちの話を聞いてみたい、何か魅力があるというか……。

私なんかは、受けてきた教育が「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」でしたが、一方的に契約社会がよくて、そうではない地縁・血縁社会はまったく個人が埋没してしまうというような……。そういう簡単な話ではないだろうと、最近つくづく思っているんです。宗教はどちらかというところ、お寺にしてもお宮にしても人の縁を強く結ばせる傾向があるので、どうしても前近代的な部分があると考えられやすい。宗教嫌いな人によくありがちな、「宗教教団というのは自由がないでしょう」というやつですね。ですから宗教学は、もう少し社会の中で果たしてきた宗教の役割を考えていかなければいけないんじゃないかなと思います。そういうことを研究する人がもっといてもいいのかなあと。



星野英紀氏

大正大学名誉教授。宗教社会学・宗教人類学を専門とし、大正大学で長く教鞭をとり、同大学長も務めた。退任後、同大学常任理事を経て、2016年から真言宗豊山派宗務総長に就任。日本宗教学会の会長、日本宗教研究諸学会連合の委員長を歴任するなど学会でも重鎮であり、国際宗教研究所では2007年から9年間理事長を務めた。

シカゴ大学大学院留学時にヴィクター・ターナーの影響で巡礼研究を志し、綿密なフィールドワークに基づく成果は博士学位論文『四国遍路の宗教学的的研究—その構造と近現代の展開を中心にして—』（法蔵館、2001）等にまとめられている。教育問題等にも造詣が深い。東日本大震災後は、福島県被災地の現地調査により寺院と地域共同体の在り方の変化を当事者の目線から追い続けてきた。本誌2016年度号「震災からの復興と宗教文化の行方」を参照されたい。

宗教社会学の「宗教の社会貢献」研究との比較

藤原 そのあたりの、民俗学の宮本常一世代と言いますか、フィールドワークをしてこられた年配の研究者の研究と、最近のソーシャル・キャピタル論を強調する人たちの研究との違いと言いますか、そのあたりは先生方からご覧になっていかがでしょうか。どちらでも人の絆というのが重要ですが、今の宗教の社会貢献論の研究者には、もともと新宗教の教団研究をやっていた人が目立っていますね。

星野 例えば歳末助け合い運動で駅前では毎年募金をしていますなんていうお坊さん、それから保護司をやっている人、教誨師はさらに大変ですね。そういう人は「自分がしているのは社会貢献活動なんですよ」「私は宗教者としてソーシャル・キャピタルの一端を担っているんですよ」なんて、あんまり考えない。新しい話としてのソーシャル・キャピタルというのは、まあ説明してみればその通りなんですけど、ただ現実をもう少し掘り返して見た方がいいんじゃないかなあと。聖職者本人たち、神主さんにしても僧侶にしても、「俺たちは社会のためになってるんだ」なんて、あんまり考えてもいないですよ（笑）。「村の仕事、町の仕事だから俺もやってるんだよね」「なかなかうまいこといかないんだよね」みたいな。

新宗教ですと、例えば天理教とか、立正佼成会の明社運動とかありますけれど、保護司をやりましょうとか、村の役や町の役をやりましょうなんて、あんまり言わないですよ（笑）。つまり、宗教の社会貢献論の研究者には、ソーシャル・キャピタルとしての教団という考え方が先にあって、「何かあったら助けに行かない」とというような感じがあるのかなあと。

それと、福島で見ていると、新宗教は単一宗教法人ですから、人が住めなくなると閉めてしまうんです、支部とか会館とか。だけど坊さんや神主さんは転勤がないので、その土地の人間関係をつなぎながら、なんとかしたいなあという思いがあって、新宗教とはだいぶ宗教の在り方

が違ってくる。創価学会の人は戸籍のカードみたいなのがあって、それを見せればどこにでも入れると、胸を張っていますよ。「孤独にはさせない」と。まあそれはそうかもしれないけれど、ソーシャル・キャピタル的な要素を宗教の中できちっと明示して、その研究をするというのは、教団宗教としての統一性のあるところはやりやすいかと思えますけれど。どうも伝統宗教の方は、じっくり中まで入ってみたいとわからないというところがあるんじゃないですかね。

櫻井 やっぱり今の若い研究者の方たちは、多くのデータを入手する手法、そしてそれをまとめて課題を抽出していく方法、そういう面にはすごく優れているし、現代だからできるというところがありますよね。そういう中から、ここはさらに検証していく必要があるね、と。たぶんそれ以前の民俗研究をされていた方々は、全体の社会の流れのようなものがわかっていて、自分がたまたま訪れたところも、その全体の中に関係づけながら理解していて、それが一つのまとめ方になっていたように思うんですね。今はそれよりも、何か問題設定をしなければと焦ってしまうところがあって。昔はけっこう同じところに何年も通いながら、それでいて、その小さな中にも全体像を把握できるような要素が含まれている、そういうことを発見しながら研究していたのかなと思いますけど。

星野 福島などで宗教者が復興しようと言うときに、一番大切なのはやる気があるかどうか、ということですよ。ところが人間の動機、やる気になるっていうのは、宗教的な使命感からなると思ったら、それは違うんです。少なくともそれだけではない。例えば、跡取り息子がいるかどうか、とかね(笑)。「子どもがいないから、がんばってもしょうがないんだよねえ」なんていう人も坊さんでいるんですよ。だから、動機づけというのは色々あって。ある程度、経済的にも自立ができないと無理だし……。細かく調べていくと、人間の本質が見えてくるところがあって、大切なことなんじゃないかなあ。個別を掘り下げていくと普遍につながるところがある、という気はしますね。先生も僕も、同じよう

に伝統宗教に関心があるから、教団宗教をやるような研究のやり方から言うと、伝統宗教の方は鶴のように何が何だかわからないですよ。宗派なんていうものは本当に力のないものであって……。

「力」ではなく、共同体を維持してきた伝統宗教

藤原 力が無いのに、社会で役割を果たしているということなんですか？

星野 僕は中野区におりますけれども、最近、お寺の入り口に防犯カメラを付けたんです。で、そこに映る人を数えてみたんですが、1日100人近くもお寺に来てるんですよ。ただ通る人もいるし。お寺にいる我々に用事がある人ばかりではない。中をうろうろしたりする。何しに来てるのかわからないですけども、お寺というのはこんなに人が来るものなのか、ということが、防犯カメラを付けて初めてわかったんです(笑)。

だから、何がどうってお寺やお宮が成り立っているのかというのは、なかなかわかりにくいと思いますね。信仰がこうであり、世界観に強大な影響を与えている、なんて、そんな仰々しくなく生きている宗教が日本にはかなりの部分にある。特にコミュニティというものを成立させていくために宗教が果たせる役割というのは、やはり維持機能ですよ。

櫻井 だから、今の宗教がどういう社会貢献しているかという点では、これまで気づけなかったこととか、思いがけない発想で社会と関わっているというような興味深い研究もあるでしょうし、もう一方では、何もなくても宗教が果たしている役割とか、これは何なんだろうというようなものも含めて捉えることで、現代社会における伝統宗教の持っている意味が見えてくると思うんですね。

例えば、神社界などでも、災害が起こったときにどうしているかという、これまであまり諸宗教との連携というものがないんですね。とこ

ろが、内部的にはつながって活動されているわけなんです。みんなでその活動を理解して、支えていこうということが当然あるわけで、それは自分たちの身近なところにもあるんだということを自覚してやっておられると思うんです。そういう意味で、コミュニティの中における神社や神職というものは、あまり見えない。目立たないが、コミュニティを維持する役割があるんです。ただ現代は、そういう神社や神主さんたちの存在がさらに見えなくなっていて、そのうえ神社が維持できないという状況になっていくことは間違いないですね。

過疎化の実態

星野 それはお寺でもそうですね。宗派によって多少ばらつきはありますが、もう過疎化で人間がいなくなるんですから、坊さんとお堂があってもどうにもならない。だから、1人の住職が何軒もお寺を兼務する、ということがあるんです。お宮さんもそうですね。七五三なんかがあるときには大変ですけれども。

櫻井 七五三でお参りの人がたくさん来てくれて、それが社入金の重要な柱になるという神社は、ごく一部なんですよ。多くの神社は、人生儀礼という中では、生まれたときのお宮参りくらいかな。また、厄年祓いも盛んに行われるようになってきていますが。

星野 東京の人は明治神宮に行ったりしますからね、氏子でもないのに。まあ、過疎の問題というのは、非常に深刻ですね。宗教にとっては。

櫻井 私は明治末期の神社整理の問題⁵⁾を扱っていたんですが、あの当時の意識は、まあ戦後も含めてですが、「自分のところの神様を取り戻してくるぞ」と(笑)。神社の国家管理時代が終わって縛りがなくなり、自由にやれるようになったわけで、前向きにどんどん神社が再建されて

いった。神社合併後の村の氏神さんの状況を調査していったのですが、最近の過疎で氏子が減るといふ時代に、改めて合併という問題について「どうなんですか」と訊かれることがあって、「いや、私がやっていたのは明治時代です」と逃げているんですけれども（笑）。それでも、今、実際に法人手続きのうで合併しようとしても、例えば社名の問題とかがあるでしょう。実質的には飛地境内という形で維持するとしても、名前を変えようとすると、すごく抵抗があるんですって。

星野 でも、どうしても人口が減りますからね。どこまで減るかはわかりませんが。あと、宗派によっても違うんですよ。曹洞宗とかは地方寺院が多いですよ。

櫻井 災害という観点がらみですけども、和歌山県と三重県の間に熊野川っていう大きな川が流れていますよね。今から5年ほど前に洪水を起こしているんです。その周辺に「百夜月」といういい響きのいい名前の地区があるんですけども、住んでいるのは1家族！ 電話をかけると舟で迎えに来てもらえるというところがあるんです。

星野 島にですか？

櫻井 いえいえ、川のそばですよ。舟でないと行けないので、川が道、生活路なんですよ。そういう中で、人家の多くが増水で襲われた集落がありましてね、そこはもう以前から村が小さくなっていて、お社も維持できないから木々に覆われおいそれと行けない。ただ、お寺さんだけは、ご先祖様を預かってもらっているということで、高台にあってみんな必死で守っていて……。普段住んでいる人はごくわずかになってしまったんですけども、お墓参りとお寺さんのことは気になるので、時折戻ってくる。超過疎といわれるが、村の誰かが見守っている、という形は今もあるんです。

しかし、これが次の世代になったら、もうどうなるんだろうかと思ひ



ムラの神社（三重県熊野市の海岸集落）

ますね。以前、滋賀県の過疎集落の調査をしたとき、山間部の集落は、災害時に救急車も入れないしヘリコプターも飛ばせない。それから高校への進学になると、もうどうしても村を出ないといけない。生活のために道路を整備したらかえって離村が早まる。行政側としては、そういう集落はある意味お金がかかるわけです。だから、できるだけ離村を勧めたんですね。で、その促進のさせ方、どこへどういうふうに土地を提供するか、ということですが、一つには、ある程度みんなが一緒に住めるようなところを提供する。すると、そこにお寺を建てご先祖様を迎えてきて、維持する、そしてまた元のふるさとを残しておく、ということがあったんですね。けれども家々が分散してしまうと、元のふるさとともなくなってしまいますね。

星野 先祖というのは、本当にリアルに生きているんですね、田舎の人にとっては。これは、今後はどうなるのかなあとと思いますが。でも、神社は流行っているところは主流行りですよ。

櫻井 そうですよ。神社格差が大きいですね。

星野 まあ伊勢神宮は言うに及ばず。熱田神宮とかもねえ。



熊野川沿い過疎集落の寺院と墓地（三重県紀和町）

櫻井 大きな神社は、確かにたくさん収益があるように見えますが、祭りを行ったり、建物の補修や森の維持などいろんなところで支出も多いようです。

星野 それは寺や神社はそうですね（笑）。熱田神宮は面白くて、神仏習合なんですよ。それで、数年前に用があってあの近くへ行ってね。そうしたら、神仏習合の時代の歴史は全部まっさら、白くなっているんです（笑）。書けばいいのになあとと思うんですが。で、近くの私の知り合いのお寺が、「うちの蔵には、あそこの神仏習合時代の仏像やら仏具がみんなあるんだ」と。「それはぜひ公開してください」と言ったら、「そういうわけにはいかない」とか言っていましたけれども。熱田神宮は戦勝の神様ですよ。だから、明治時代になると、インドの神様なんかが入っていると、戦争に負けると思ったんじゃないですか（笑）。でも、神社はすごいのはすごい、立派ですよ。

寺社の後継者問題

櫻井 まあ、それでも今はどうでしょうねえ。先ほど、宮司が少なくなつたというのがありましたけれども、結局、兼務が多くなつてしまっ

た。大きな神社に神職が集中する傾向がありますから。

星野 お坊さんはですね、仏教系大学に行って、3か月講習を受ければお坊さんになれるというわけではないんです。得度をするときに、師匠というのが必要なんです。だから、お師匠さんを見つけられないと得度できないし、2~3年かかるんですよ。大正大学でも、お坊さんの子どもはもうどこかへ行ってしまって、仏教学がいつも定員割れしそうですね。僕は、「ここの学校の学部に入ったらお坊さんになれる、つまり、先生方が学生を弟子に取る、そうすればあつという間に定員なんか超えるぞ」と言っているんですが(笑)。

櫻井 でもそういう意味では、師匠から弟子への継承という形があるんですね。

星野 まあ、今はかなり形式的なことになってしまって……。昔は師匠が寺まで探してやっていたけれども、そんなことは今ないですし、教育は大正大学でやって、体を使う修行はそういう専門のお寺に入って2~3か月でやってくると。でも最近では、神職もそうですけれど、女の人の方がすごい勢いですね。面白いのは、女の子だけのお寺で、いい結婚相手が出て、一緒になるじゃないですか。我々年寄はみんな、「婿さんが来たから彼女はもう譲るんだろう」と思っていたんですが、譲らなくなってますね。「私がやります」と。だから本当に男女共同参画時代になってきていますね。僕よりも少し上のお坊さんたちは、「尼さんの会」を作れと言うんですよ。僕は「それはだめだ」と言っているんです。「尼さんの会」というのは差別になるんだから、男と一緒にやるっていうようにしないとだめだと。だから、段々これから日本では、神主さんでもそうですけれど、女の人が出てくるんじゃないかなあとと思います。神職では女の人というのは、厄介なことを言えば本当はいけないですよ。

櫻井 いえいえ、そんなことはないですよ。戦後ですけれどね、「女子神職」を制度的に認めたのは。今はむしろ、そうして頑張っている方もいますし。神職の家の子どもは「しょうがないからおまえ継げ」とか、「婿さんを探して連れて帰ってこい」と親に言われたとか面白く語られることもあるみたいですけど。しかし一方では、「神社にお勤めしよう」というスピリチュアル系の感じで入ってくる学生もいるんです。資格は取れるんですよ。ところが、奉職先神社が少ないんですね。まあ、採用側の理由としては、神職の場合はお祭りの前に潔斎をしたり、お籠りをして泊まったりする必要がある、その設備が整っていない、と。確かにかつての官国幣社は女性神職は関係ありませんでしたか



櫻井治男氏

皇學館大学特別教授。宗教学・宗教社会学を専門とし、神社祭祀研究、近代神道研究、特に明治末期の神社整理と戦後の神社再建（神社復祀）の調査を進めた。近代以降の社会変動が地域共同体で祀られてきた神社にどのような影響を及ぼしたのかの実態を地域住民に寄り添い研究してきた。また、調査には学生を伴うことを大切にし、地域を知ることのみならず、地域課題をともに考え合える人材育成にも力を注いできた。皇學館大学では文学部と社会福祉学部の教授・学部長を歴任し、神道の福祉活動の可能性を切り開いてきた。日本宗教学会常務理事、神道宗教学会理事。国際宗教学研究所理事を2016年まで務める。社会活動として、三重県文化財保護審議会委員等を務める。主な著書に、地域の視点から「神」観念を解き明かした『地域神社の宗教学』（弘文堂、2010）、『蘇るムラの神々』（大明堂、1994）、共編『日本祭礼行事集成』（日本祭礼行事集成刊行会）などがある。

ら、そういう設備もまったくなかったんですね。それに対して、積極的
に変えよう、というような神社もあります。

それからもう一つは、神職資格を得る人で、「地域おこし協力隊」⁶⁾に
目を向ける人も出てきました。今、日本は、地方創生ということを言っ
ていますよね。そういうときに、地域おこし協力隊へ応募して「3年間
私たち頑張ってきます」と言ってね。で、地域の超高齢社会に入り込む
わけですが、老人たちの記憶の中には「自分たちの頃には盛大な祭りが
あったんだけど、それがもうできなくなった」というのがあって、
「それを私たちがアーカイブ化して、何とか盛り上げます」と言った途
端に、地域の年寄りがみんな元気になり出したと、そういうことも始
まっていますね。もちろんその場合に、ことは神社だけの問題ではなく
て、その地域の宗教文化の問題として、視点を広げて捉えていってくれ
たらいいと思います。

行政側の認識とのギャップ

藤原 地域創生に寺社が公的に関わるというのは、やりようによっては
問題になりませんか？

星野 そうですねえ。まあ政教分離というのは、よく言われているよう
に、日本の宗教伝統の中から出てきたものではないので、変にくそ真面
目に政教分離を捉えたりされると……。東北の震災のときに、地方公共
団体の役人が、津波等で亡くなられた遺体の収容所で、お坊さんが拝ま
せてくれと頼んだら、「政教分離だから入れません」と言ったとか
ね……。そういうときにそういう言葉を振りまわすというのは、日本に
は歴史的な背景がないからでしょうねえ。寺の場合には、檀家のつなが
りが結構あって、コミュニティのサブ・カテゴリーとしての寺とか、檀
家同士とか、氏子同士というのもあると思うんですけど、それを行政は
活用した方がいいなあと思うんですよ。私たちの地区の、地区って言っ
ても昔の大字あざですけれども、だいたいそこが檀家や氏子になっていて、

法事なんかでしょっちゅう会っているわけですよ。だから、そういうのを活かしていく方法を考えた方がいいと思いますね。政教分離もあんまり堅苦しく言っていくと、本当に何の役にも立たないものになってしまうように思いますね。先生は、今も調査されているんですか。

櫻井 まあ、昔のように熱心な調査はできませんけれども、やっぱり体力が(笑)。祭りの調査をやろうと思ったら、神輿と一緒に走れるようでなくなったら、もう止めた方がいいですよ(笑)。

星野 僕も巡礼の調査を止めました。巡礼と一緒に歩けなくなっちゃって(笑)。

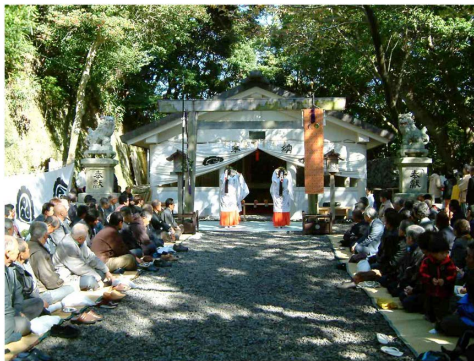
櫻井 文化財保護という問題がありましたよね。私は今、三重県の文化財保護審議委員をやっているんですが、その担当が民俗なんですよ。で、いわゆる伝統行事の中には、いわゆる「荒くたい」ものがあるんです。一例を挙げると、名古屋の近くに多度というところがあって、「上げ馬神事」といって、急な坂を馬に乗った中学生が一気に駆け上がるんです。ときには馬がケガをするんですよ。それが動物虐待ということで、世界から批判の声がファックスで届いたんです。で、文化財指定を取り消せという話があって……。また、馬が無事に上がるためでたいということで、乗り手に昔は一升瓶をあてがっていたんですよ。だから取り消し理由に、「青少年健全育成にもとる」という声があって。そういうような伝統行事に対する批判が一方でありましてね。伝統行事を文化財に指定しているだけで、あとはどうなっていくのか、もし保護というのなら、どういう保護の形があるのか……。有形文化財はわかるんですよ。建造物が倒れたら、直していくための補助金を出すわけですから。ところが祭りとか、行事に関する無形民俗文化財の場合は、本当に危機に陥っていると思います。また地域の人たちは、「祭りがなくなった」という言い方はしたくないですよ。「ただ休んでいるだけだ」と。

星野 でも祭りっていうものは、祭り研究から言えば、反社会的なところ、常識的基準を壊すようなところは……。

櫻井 そうなんです、お酒飲んでなんぼの世界もあるんですよ。そのときは逸脱してくれないと。それともう一つは、普段の社会状況とは身分が逆転するという。ところが、それが難しくなっている。早川孝太郎という民俗学者が研究された奥三河の花祭⁷⁾がありますが、あれも、国指定の重要無形民俗文化財ですが、地区によっては廃絶のところがあった。

星野 今でもやっているんでしょう。

櫻井 いや、すたれているところもあるし。花祭りだけではないのですが、民俗芸能の伝え方としては、例えば都会地に出た人が、自分たちのパフォーマンスを見せ、村とは関係なかった人に教える。あるいはこの頃、劇団や芸術グループが小学校の空き校舎を借りて集団で生活するなんていうのがあるでしょう。そういう人たちがお手伝いに来てくれるとかね。もう一つは、海外の人が来て、そこへ住みついて、そしてその人たちがお祭りだけでじゃなくて、区長も務めようかと、そういう海外の



老人たちの前で舞を披露するムラの少女（三重県南伊勢町・大賀神社祭礼）

方もいらっしゃるんです。そういう人たちは、お祭りも信仰とかいうことではなくて、その土地にある文化だということに関わっている。そういうパターンで次世代が受け継ぐところもありますけれど。

外国人を受け入れるムラ

藤原 外国人で区長になるという例が出てきているんですね。これまで濃密な人間関係であるムラが批判されてきたのは、閉鎖的だということがあったわけですね。

櫻井 まあ、「あの外国人だし、ちょっと感覚は違うのかな」と言いながらも、共同作業とか共同の祭りとか、そういうお付き合いを村の人が受け入れているところがありますよね。そうした中で、村を運営する役も、本当に理解された海外の人には、逆に「じゃあ、あんたやってよ」と、そういうところもあると聞いていますね。

星野 観光ブームで来る若い外国人なんていうのは、日本語も話せるし、安い旅館に泊まったりしてね、いわゆる観光客然としなくなったから、けっこう馴染めるんじゃないですかねえ。

櫻井 一方では就職というか、集団でどこかの大工場周辺の中に入っただけのときは、近隣とものすごいトラブルが起こるんですけども、個々で入っただけのときは受け入れるくらいのキャパシティを持っていて、まあ、アウトサイダー的な存在として受け入れているのかどうかまでは、もう少し詳しく知っておく必要がありますが。

星野 僕は、さっき言ったようなことは、本当にそうだと思うんですよ。狭い仮設住宅で、四畳半で、隣の人の咳が聞こえるみたいなところでも、それこそ変な奴はいるですよ（笑）。村ごと入っちゃっているから。「でもしょうがないや」と、村の中の一つの存在として受け入れ



二本松市にある安達運動公園内の浪江町仮設（2014年7月29日）

ている。どうやって受け入れているのかはわかりませんが、必ずしも一様にパターンイズされた、平均的な田舎の人が一緒に住んでいるというのではなくて、その中にはそれぞれ個性があって、それも受け入れているというところがある。「この人とは運命共同体だから、多少癖はあるけれども一緒にやっていくんだ」と。「親父はいい人だったんだよねえ」みたいな感じで（笑）。むしろ今の役所とか地域センターでやっている老人会みたいな方が、ときには排他的なところがあるんじゃないかなあと思いますね。

そういう面があるので、極端な排他主義とか前近代性ということで地域共同体を否定していくのは、ちょっと問題があるんじゃないか。例えば、現代だって変な奴はいるわけで（笑）。だから、そういうものを包含していくというのは、いつの時代でも同じことなんじゃないかなあと思いますね。これからの共同体は当然変わっていかねばいけなと思いますけれども、自分たちの共同体としての責任というか、「自分たちの共同体だ」というような思いをどこかで持っておかないと、災害もあればマイナスなことも起こるので。なんでもかんでも今ふうにやればすべてうまくいんだというわけにはいかないと思いますけれどね。

櫻井 そうですね。あの、現代社会は不寛容社会だと言われていますよ

ね。しかし、その不寛容という意味が、旧来の共同体で言う不寛容とは、意味が違っているような気がするんですよ。共同体の中では、怠け者も逸脱者もいるんだということを承知で、一緒に過ごしていた、その中で宗教が果たしてきた役割があるわけで……。ただ、これだけの不寛容社会の中で、どれだけ宗教がその役割を果たせるかという、理屈だけではないか。そここのところは、やはりよく見極めないといけませんね。

星野 まあ、「多様化」と一言で言われているのは、現代だけのことではないようにも思います。お寺でも、檀家の中でしばらく顔を出さなかった人がきて、付き合ってみると、やむを得ないというか背景に背負ったものがあるんだなあと思うこともあるけれど、それが昔なら、共同体の中でけっこう解決していたんです。それが解決しきれなくて、「どうするんだろうなあ、ここの家、そのうち消滅しちゃう感じだなあ」という思いをすることがありますね。「この人がいなくなったらだめだなあ、こんなばらばらじゃあ」と。

櫻井 そういうキーパーソンがある程度見えていたんですよ、昔は。だから先ほどおっしゃったように、災害なんかのときに、地域の人たちの中で「あの人がリーダーだ」というのができあがっているんですよ。その人らが、やっぱり災害時には大きな活躍をしてくれますよ。その人らと外部の人とがうまくつながっていくと、支援体制もすごく早いと思います。ところが行政としては、委員会に出ているとか、組織の重要な役目を務めているとか、肩書というところで捉えたりしてしまう。そうするとうまくいかない場合がある。

星野 まあ、細かい地区とか、^{あざ}小字とか^{あざ}字とかいうつながりが、都会では非常に弱くなってしまって、それこそ議会民主主義で自分たちの代表を選んで、という仕組みはあるけれども、隣近所、20軒30軒で、誰がお互いに面倒を見るのか、みたいなレベルが本当になくなってしまっ

て、困ったもんだなあと思います。

ムラの再生は可能か

藤原 そうしましたら最後に、これからどうするかと言いますか、どうやってその伝統的な共同体のよいところを蘇らせるかについてお考えを伺いたいのですが。もう不可抗力的になくなっていくのでしょうか……。

星野 僕が調査した福島では、限られたところですが、新しい街づくりをしているんですね。もともとは2万人いたんですけども、放射線の線量も高いし、除染が終わったところに5,000人くらいの規模で街を作りたいと。そこにお医者さんもいればスーパーもあるし、というようなことの計画を、かなりやっているんです。そういうところで僕は、やっぱり伝統的なお寺とかお宮とかいうものも隣接するところに設けて、もともとその地域にいた人たちに帰って来てもらうようなものを作るのがいいと思いますね。まあ、なかなか難しく、新宗教はどうするのかとか、いろんなことが出てくるとは思いますが。しかし、コミュニティの一種の下支えをしていたサブ・カテゴリーみたいなものを、僕



福島市笹谷仮設での浪江町請戸地区の「あんば祭り」(2015年2月15日)

は作っただけだと思う。それを公的なものが支援するかわかりませんが。だいたい、福島は被災地なんか、新しい人が住みたいということではなくて、昔の人が帰りたいだけですからね。

櫻井 私も、最近の例ではないですが、戦後に募集して新たに居住した集落に、神社を建てたということを見ましたけれども、現代もそうした村は存続しているんです。ただ、あんまり前向きではないかもしれませんが、これからの社会の中でコミュニティはどうなっていくか、あるいはそこでの宗教の役割を問うときに、逆説的ですが、コミュニティをどう豊んでいくかということに宗教はどう関わるのか、という発想も必要かなと。ますます高齢社会、少子社会になったときに、確かに行政としては、1軒でも残っていればそこを守らなければならないんですが、現実に1軒といたら、そこだけでの単独の暮らしで、共同性というものはほとんど見られない。逆に言えば、そうして豊んでしまったような集落の中で、お寺や神社というものをどんなふうに位置づけていったらいいのか、というのは、大きな課題であるように思います。それはまあ、旧来そういうものがあつたという地域を前提としての考えですけども。けれども、新しくできあがっていくコミュニティにしても、お寺とか神社とか言わずとも、何かみんなにとっての重要な共有広場、コモンズみたいなものが必要とされているわけで、その機能を今まではお寺や神社が果たし、歴史的な積み重ねの中で存在してきたのだらうと思いますから、それさえも不要だという社会になってしまうと、非常に殺伐としてくるように思います。

星野 僕は、最後にチェルノブイリに行ってみたい。放射線量が高いところに、お年寄りの方がいて、その外延にもまだ町が残っているんです。そこでは宗教や文化はどうなっているんだろうかと。放射線量が高い高い、ということだけではなくて、そういうところで、彼らにとって宗教はどういう役割を果たしているんだろうか。これは個人的な希望ですが、生きているうちにいきたいとしますね。

注

- 1) アメリカの人類学者マーガレット・ミード(1901-1978)は、「逸脱者」について、『サモアの思春期』(1928)などで論じている。『サモアの思春期』では「集団の規範とはげしく葛藤する」若者たちの事例を紹介しつつも、その一方でサモアの文化を「現在わずかながらもヨーロッパ化しているけれども、すべての葛藤を苦もなく解決してしまう余地を多分に残している」と述べた。
- 2) 今井照(1953-) 福島大学教授(行政政策学類 地域と行政専攻)。専門は自治体政策、地方自治論。
- 3) F・テンニェス(テンニース、1855-1936)以来、村落共同体や家族など、地縁や血縁によって自然発生した集団をゲマインシャフト、都市や会社など、特定の目的や利害を達成するため作作的に作られた、契約関係にもとづく集団をゲゼルシャフトと呼び、近代化とは前者から後者への移行であると論じられるようになった。
- 4) きだみのる(1895-1975)作家、翻訳家。1967年に発表した『にっぽん部落』は、きだが「日支事変の末期で世界戦争が欧州では始まっていた頃」に、14軒からなる部落の廃寺の庫裡を借りて住み、住人とつき合うようになった経験に基づく記録。「物を貰ったら部落ではお返しが強制的に必要」であり、都会の合理主義が想像するのは全く性質の違う「部落の感じ方、考え方、行動のし方にふれることになった」。きだは、メモやノートをとることなく、住人たちと親しく交わり、彼らと同じように過ごしたという。
- 5) 既存の神社の廃止・合併あるいは他の神社の境内への移転のこと。明治39年頃から全国的に着手され、実施に数年間を要し、大正3年にはおおかたの整理が済んでいたとされる。
- 6) おおむね1年から3年にわたり、都市から過疎地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊」として委嘱している制度。隊員は任期中、さまざまな「地域協力活動」を行うが、2015年3月末時点の調査では、任期の終了後も隊員の約6割が同じ地域に定住しているという結果もある。

総務省「地域おこし協力隊の概要」

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html

板井正齊(皇學館大学准教授)によれば、若者の「田園回帰」と「地域おこし協力隊」にはユニークな活動のつながりがあり、地域の人口減少という課題について、祭礼をはじめとした宗教ネットワークが一定の有効性をもつ。日本宗教学会第75回学術大会でのパネル発表より。

- 7) 愛知県北設楽郡の民俗芸能。毎年11月から3月にかけて各地区で開催され、国の重要無形民俗文化財にも指定(1976年)された。悪霊を払い除け、神人和合、五穀豊穡、無病息災を祈る目的で、鎌倉～室町時代にかけて熊野の山伏や加賀白山の聖によって伝えられたのがもとになった神事である。花太夫、宮人などを神事にあたる役を中心として、およそ40種類にもおよぶ舞が夜を徹して行われる。